

2月12日（金）

本日は、第5週目のテーマである「国際教育開発における課題（Various Issues of International Cooperation and Education）」のリフレクションが行われ、研修員7名が参加しました。

まず、Bグループのリフレクションは、生徒間の差別の減少、国際的な調査、学習のネットワーク構築、教育の質を向上するための政策の作成について、事前研修資料を基に行われた議論について共有しました。その後、事前研修資料の提供者の1人である日下部先生に対し、研修員から事前研修資料にあったバングラデシュのピア・チュータリング（peer tutoring）の事例について詳細が聞きたいとの要望がありました。日下部先生は、バングラデシュ農村地域において独自の言語を持つ少数民族の学習効果を向上させるため、広島大学、現地大学、現地政府、学校関係者によって、ピア・チュータリングの効果的なプロセスについて協議が行われた経験を話されました。研修員からは「効果的な政策決定プロセスだと思った」との感想があり、日下部先生は支援の対象となる途上国政府側と支援を行う先進国政府側の対話の必要性を述べられました。

続いて、Aグループの発表でしたが、発表者が欠席だったため、これまでの議題における質疑応答の時間となりました。研修員から「自国において退学児童の問題が深刻であり、この問題解決における成功事例はないか」との問いが寄せられました。そこで日下部先生は、NGOやグラミン銀行の設立、政府による現金や米の支給、給食などによって就学率が向上したと、バングラデシュの事例を紹介されました。

司会者より、「教育の質と量のどちらを重視すべきか」という問いが提起されました。ある参加者は、昨今安定をみせていた就学アクセスの問題が新型コロナウイルスの蔓延によって再び顕著になっていること、また、教育の質の問題に関し、1つの国の中にも地域差があり、様々な問題が存在する中で、教育の質の向上とはどのような教育のことを指すのか、どの程度の向上を目指すのか、教育の質の条件を決めることが必要ではないかと意見を述べました。さらに他の研修員の発言より、質と量の両方に焦点をあてている国、質に着目するというよりまずは量の問題を解決しなくてはならない国、と研修員の参加国間での違いもみられました。

本日は日下部先生が出席して下さったこともあり、事前研修資料の内容を基に、研修員は先生へ積極的に質問を行っていました。

